

## *Venus and Adonis* と *The Rape of Lucrece* における

### ハイフン付き複合語研究

大 賀 信 孝

(1999年11月30日受理)

ハイフン付き複合語は現代普通に使われている。新聞、雑誌の文中で見かける。小説の文中で見かける。その他の分野の文中でももちろん見かける。現代ではこのように、ハイフン付き複合語を当然のものとして使用したり、受け入れたりしている。換言すれば、現代の英文の中にすんなりハイフン付き複合語はとけ込んでいるのである。現代の事情はこうである。でも現代はこのような事情にしても、これは過去にも通ずることであろうか。言い換えると、過去も同じようにハイフン付き複合語が使用されていたのであるであろうか、それとも差異はあったのであろうか。ハイフン付き複合語が突然現代で発生したとは考えられないので、こうした疑問は当然ながら起こる。

そこで今回の論文では、過去と現在の比較を目標にすえ、過去に焦点を当てハイフン付き複合語使用例の歴史をたどってみることにしたい。ただし制限はつける。というのも歴史をたどると一言にいても容易ではないからである。歴史全体をたどろうとすると、時間的な幅がありすぎて一挙に行うのは至難すぎる業だからである。そのため歴史分析は分断ということにはなるが、区分けする必要がある。つまり時期的に区別して考える必要があるわけで、そうするとスムーズに分析が進むばかりでなく、分析の密度が高まることになる。

以上のような理由で時代的に区別してハイフン付き複合語の使用例史をたどることにするが、こうした試みは今回が最初であるので、順序立てて歴史の始まりの部分—ハイフン付き複合語の起源期—の分析から行うことにする。具体的にはそれは16世紀末から17世紀初頭のことであるが、<sup>(1)</sup>こうした時期は驚くことに Shakespeare の活躍期と重なっている。これは幸運なことで、ハイフン付き複合語の起源調査に最適の資料が Shakespeare より得られることになる。そこでこうした事情より、今回 Shakespeare の2作品—*Venus and Adonis*, *The Rape of Lucrece*—を資料として使用することにする。<sup>(2)</sup>ただし現代版として編集者の脚色が加えられた text は使用しない。

現代版 text では編集者により新たなハイフン付き複合語が加えられたり、かつては存在したハイフン付き複合語が削除されたりしているからである。text は Shakespeare の原稿に一番近いと想定される *Shakespeare's Poems, A Facsimile of the Earliest Editions* (Yale University Press, 1964) を使用する。そしてこの text を基にして、ハイフン付き複合語を作品中より拾い出し、つぎのような分析を行いたい。

- (1) *Venus and Adonis, The Rape of Rucrece* に現れるハイフン付き複合語が詩行中でどのような品詞として機能しているのかを示すとともに、各分類項における例の合計数と全体に占める割合を示す。
- (2) 文法・修辭的視点より、ハイフン付き複合語を使用することの意味について探ってゆきたい。

## I ハイフン付き複合語の品詞機能分析<sup>(3)</sup>

### (A) Compound Noun

#### (1) subject

##### (i) (noun+noun)

That the star-gazers hauing writ on death,  
May say, the plague is banisht by thy breath. VA, p.28<sup>(4)</sup>

##### (ii) (adjective+noun)

But low-shrubs wither at the Cedars roote. RL, p.94

##### (iii) (prefix+noun)

Selfe-loue had neuer drown'd him in the flood. RL, p.75

##### (iv) (prefix+gerund)

And loe there fals into thy boundlesse flood,  
Blacke lust, dishonor, shame, mis-gouerning RL, p.94

#### (2) object of preposition

##### (i) (noun+noun)

Looke in mine ey-bals, there thy beautie lyes, VA, p.12

##### (ii) (adjective+noun)

Wracke to the sea-man, tempest to the field: VA, p.26

##### (iii) (adjective+gerund)

You might behold triumphing in their faces,

In youth quick-bearing and dexteritie, RL, p.129

(iv) (prefix+noun)

Say for non-paimet, that the debt should double,

Is twentie hundred kisses such a trouble? VA, p.28

(v) (past participle+noun)

With heauie eye, knit-brow, and strengthlesse pace, RL, p.97

(3) object of verb

(i) (noun+noun)

She vaild her eye-lids, who like sluces stopt VA, p.47

(ii) (adjective+noun)

Rich prayes make true-men theeues: so do thy lips VA, p.37

(4) object of participle

(i) (noun+noun)

The curtaines being close, about he walkes,

Rowling his greedie eye-bals in his head. RL, p.80

(ii) (past participle+noun)

Another, and another, answer him,

Clapping their proud tailes to the ground below,

Shaking their scratcht-eares, bleeding as they go. VA, p.45

(5) complement

(i) (noun+noun)

Yea though I die the scandale will suruiue,

And be an eie-sore in my golden coate: RL, p.73

(B) **Compound Adjective**

(i) (noun+noun)

Ere he arriue his wearie noone-tide pricke, RL, p.100

(ii) (noun+adjective)

But if the like the snow-white Swan desire, RL, p.111

(iii) (noun+present participle)

Night-wandring weezels shreek to see him there, RL, p.77

(iv) (noun+preposition)

- My Honnie lost, and I a Drone-like Bee, RL, p.103  
 (v) (noun+past participle)  
 And round about her teare-distained eye RL, p.138  
 (vi) (adjective+noun+suffix)  
 These blew-veind violets whereon we leane,  
 Neuer can blab, nor know not what we meane. VA, p.12  
 (vii) (adjective+noun)  
 “Such shadowes are the weake-brains forgeries, RL, p.85  
 (viii) (adjective+adjective)  
 Into the deep-darke cabbins of her head. VA, p.50  
 (ix) (adjective+present participle)  
 Thou backst reproch against long-liuing lawd, RL, p.92  
 (x) (adjective+past participle)  
 Though weake-built hopes perswade him to abstaining RL, p.69  
 (xi) (adverb+present participle)  
 Canceled my fortunes, and inchained me  
 To endlesse date of neuer-ending woes? RL, p.107  
 (xii) (adver+past participle)  
 The well-skil’d workman this milde Image drew RL, p.135  
 (xiii) (verb+noun)  
 Make me not obiect to the tell-tale day, RL, p.101  
 (xiv) (verb+adjective)  
 While in his hold-fast foot the weak mouse pateth, RL, p.89  
 (xv) (preposition+noun)  
 All this before-hand counsell comprehends. RL, p.86  
 (xvi) (prefix+present participle)  
 Loue-lacking vestals, and selfe-louing Nuns, VA, p.38  
 (xvii) (prefix+past participle)  
 Till LVCRECE Father that beholds her bleed,  
 Himselfe, on her selfe-slaughtred bodie threw, RL, p.145  
 (xviii) (past participle+adverb)  
 Her ioie with heaued-vp hand she doth expresse, RL, p.68

(xix) (past participle+past participle)

To hold their cursed-blessed Fortune long. RL, p.104

(1) complement

(i) (noun+adjective)

This guilt would seem death-worthie in thy brother. RL, p.93

(ii) (adverb+adjective)

Were I hard-fauourd, foule, or wrinckled old, VA, p.12

(iii) (adjective+noun+suffix)

Were I hard-fauourd, foule, or wrinckled old,

Il-nurtur'd, crooked, churlish, harsh in voice, VA, p.12

(iv) (prefix+past participle)

Were I hard-fauourd, foule, or wrinckled old,

Il-nurtur'd, crooked, churlish, harsh in voice,

Ore-worne, despised, reumatique, and cold, VA, p.12

(v) (past participle+adverb)

Shee there remaines a hopelesse cast-away, RL, p.98

(C) **Compound Verb**

(i) (prefix+verb)

And Titan tired in the midday heate,

With burning eye did hotly ouer-looke them, VA, p.14

(D) **Other Compound Words**

(i) (noun+noun)

Grim-grinning ghost, earths-worme what dost thou

To stifle beautie, and to steale his breath? VA, p.46

(ii) (noun+preposition)

With tears which Chorus-like her eyes did rain. VA, p.22

(iii) (noun+suffix)

For burthen-wise ile hum on TARQVIN still, RL, p.117

(iv) (adverb+verb)

Faire-fall the wit that can so well defend her: VA, p.26

## II 数量表示

	A						
項目	1-i	1-ii	1-iii	1-iv	2-i	2-ii	2-iii
例数	2	1	3	1	7	7	1
割合	1.4%	0.7%	2.2%	0.7%	5.1%	5.1%	0.7%

	A						
項目	2-iv	2-v	3-i	3-ii	4-i	4-ii	5-i
例数	1	1	4	3	1	1	2
割合	0.7%	0.7%	2.9%	2.2%	0.7%	0.7%	1.4%

	B						
項目	i	ii	iii	iv	v	vi	vii
例数	1	8	21	2	4	17	2
割合	0.7%	5.8%	15.2%	1.4%	2.9%	12.3%	1.4%

	B						
項目	viii	ix	x	xi	xii	xiii	xiv
例数	3	3	7	2	3	2	1
割合	2.2%	2.2%	5.1%	1.4%	2.2%	1.4%	0.7%

	B						
項目	xv	xvi	xvii	xviii	xix	1-i	1-ii
例数	1	2	7	2	1	1	1
割合	0.7%	1.4%	5.1%	1.4%	0.7%	0.7%	0.7%

	B			C	D		
項目	1-iii	1-iv	1-v	i	i	ii	iii
例数	2	1	1	5	1	1	1
割合	1.4%	0.7%	0.7%	3.6%	0.7%	0.7%	0.7%

	D
項目	iv
例数	1
割合	0.7%

### III grammar, rhetoric の視点より見たハイフン付き複合語

#### (1) grammatical word order 打破による表現の新鮮味

- (i) すでに(I)のところで示したけれども, adjective として機能する (noun + present participle) の形のハイフン付き複合語は21例ある。(III)ではこの分類を基礎に, 複合語を構成する2語の関係に考えを進めると, 21例中すでに例示した1例を加えた3例を除いて残りはすべて, 次のように

The hot sent-snuffing hounds are driuen to doubt, VA p.36

2語の syntactic な関係が object と present participle の関係であり, 位置関係は (object → present participle) のようになっている。このことは問題ありである。grammatical word order の立場よりいえばこの位置関係は規則に合致していないからである。つまりこうした場合本来なら (present participle → object) となるべきだからである。それゆえこうした word order は grammatical word order から逸脱し, 換言すればそれを打破しているわけである。確かに問題ありとなるところである。が, しかし一方視点を変えて syntax の立場を離れて表現技巧という別の立場より考えると, 事情は異なる。こうした位置関係に意味がでてくる。つまりこうした位置関係は表現に新鮮さを加味し, 単調さを忌避すべく活用されているのである。これはもちろん作者の意図するところである。

- (ii) 同様なことは Compound Adjective, Other Compound Words のところで示した (noun + preposition) の形のハイフン付き複合語についてもいえる。こうした例は計3例あるが, いずれも syntactic な関係—object と preposition—に問題はないが, 位置関係に問題があり, grammatical word order の規則に合致していない。本来ならハイフン付き複合語を構成する2語の位置関係は (preposition → noun) であるのに, それとは逆の位置関係になっているからである。こうした現象は (i) 同様 grammatical word order 打破による表現の新鮮味を狙ったものである。

#### (2) conjunction, preposition, adverb の省略による語句の簡潔化

語句の冗長さを回避して簡潔なものにすることは, 現代, 英文を作成する場合肝要な事である。事情はルネサンス期の Shakespeare の場合も同様であった。つまり本来であれば conjunction, preposition, adverb が入った語句であるのにそれらを省略し, 語句をハイフン付き複合語に変えて簡潔にしているからである。作品中よりこうした

例を拾い出してゆくと、conjunction, adverb の省略例としては次のようなものがある。

(i) That spots & stains lous modest snow-white weed. RL, p.72

(as white as snow)

(ii) To hold their cursed-blessed Fortune long. RL, p.104

(cursed and blessed)

そして preposition の省略例としては次のようなものがある。

(i) So fares it with this fault-full Lord of Rome, RL, p.97

(full of fault)

(ii) Or blot with Hell-born sin such Saint-like forms. RL, p.135

(born in Hell)

(iii) And round about her teare-distained eye RL, p.138

(distained with teare)

(iv) Himselfe, on her selfe-slaughtred bodie threw, RL, p.145

(slaughtred by her selfe)

さてこれらの例では、ハイフン付き複合語と conjunction 等を加えた語句とを比較できるように記述しているのでお分かりのように、ハイフン付き複合語のほうが表現的に簡潔なものになっている。

### (3) 比喩的技巧によるイメージの明確化

Shakespeare は表現技巧を驚嘆するほどの巧緻さで我々に色々と披露してくれるが、ハイフン付き複合語における比喩的技巧もそうしたもののうち的一种である。*Venus and Adonis*, *The Rape of Lucrece* 両作品で例は多くないながらも、そうした比喩的な例はいくつか見うけられる。まず最初は“rose”という語を使った例で、

(i) Rose-cheekt Adonis hied him to the chace, VA, p.7

というようにバラのように赤い(頬)という比喩表現を内包したものである。

二番目は“rubi”という語を使った例で、

(i) Once more the rubi-colourd portall opend,

Which to his speech did honie passage yeeld, VA, p.26

というようにルビーのような紅色の(口=唇)という比喩的表現を内包したものである。

三番目は“wax”という語を使った例で

(i) Set thy seale manuell, on my wax-red lips. VA, p.28

というようにろうのように赤い(唇)という比喩的表現を内包したものである。



四番目は “cole” という語を使った例で、

- ( i ) And cole-black clouds, that shadow heuens light, VA, p.29

というように石炭のように黒い（雲）という比喩的表現を内包したものである。

五番目は “snow” という語を使った例で、

- ( i ) But if the like the snow-white Swan desire,

The staine vppon his siluer Downe will stay. RL, p.111

というように雪のように白い（白鳥）という比喩的表現を内包したものである。

以上のような例で数からいけば5種類ということになる。

さて上記のように比喩的な表現を内包するハイフン付き複合語を引用し解説を加えたわけだが、こうした技巧はどうした目的で駆使されているのかと考えると、直截的な表現で視覚的な連想をさせて明確なイメージを植え付けるためであるといえる。つまりは単に色を表す語よりこうした表現のほうが意識にきっちりとどまるからである。

#### (4) alliteration に見える音効果

alliteration は音に関連した韻律技法である。韻文中はもちろんのこと、ハイフン付き複合語にもその存在は認められる。*Venus and Adonis, The Rape of Lucrece* では alliteration が認められるハイフン付き複合語例がいくつもある。それらでは alliteration 構成のため種種の音が利用されている。具体的にこのことを説明してゆくと、“fricative”を利用して alliteration を構成しているものには次のようなものがある。

- ( i ) Or as the fleet-foot Roe that's tyr'd with chasing, VA, p.30

- ( ii ) The hot sent-snuffing hounds are driuen to doubt, VA, p.36

そして“stop”を利用して alliteration を構成しているものには次のようなものがある。

- ( i ) On his bow-backe, he hath a battell set, VA, p.33

- ( ii ) Into the deep-darke cabbins of her head. VA, p.50

- ( iii ) Grim-grinning ghost, earths-worme what dost thow meane VA, p.46

- ( iv ) Her pittie-pleading eyes are sadlie fixed RL, p.90

- ( v ) Make me not obiect to the tell-tale day, RL, p.101

そして“liquid”を利用して alliteration を構成しているものには次のようなものがある。

- ( i ) Thou backst reproch against long-liuing lawd, RL, p.92

(ii) Would bring him mulberries & ripe-red cherries, VA, p.53

そして“semi-vowel”を利用して alliteration を構成しているものには次のようなものがある。

(i) Which giues the watch-word to his hand ful soon, RL, p.80

以上のようなものである。このことより分かるのは alliteration による音の反復にバラエティをもたせることで、alliteration を含むハイフン付き複合語が音声化された場合の音響的な多様性の面白さを狙ったということである。

#### IV ま と め

(1) ハイフン付き複合語の品詞機能に割合の立場より言及すれば、Compound Noun として機能している例は全体の25.2%を占め、Compound Adjective として機能している例は全体の68.4%を占め、残り6.4%を Compound Verb, Other Compound Words で占めている。

このことより形容詞としての機能例が他をかなり引き離して最多であることが分かる。

(2) grammar の立場よりいえば、表現の新鮮味を出すためハイフン付き複合語は grammatical word order を順守していないし、表現的な簡潔さを実現するため conjunction 等を省略している。

(3) rhetoric 的には、比喩的技巧をハイフン付き複合語は内包することで、イメージを明確なものにしている。

(4) 韻律的には、ハイフン付き複合語は alliteration による音響的多様性からある種の面白さを生みだしている。

#### Notes

(1) Cf. Crystal D., *The English Language* (Penguin Books, 1988) pp.191-196.

Cf. 中尾俊夫 「英語発達史」 篠崎書林 1979 p.5.

(2) 論文の中で出典を示す場合、*Venus and Adonis* と *The Rape of Lucrece* はそれぞれ VA, RL と省略して表示する。

(3) *Venus and Adonis*, *The Rape of Lucrece* 両作品中のハイフン付き複合語の合計数は139である。

(4) 引用の場合、可能な限り原典に忠実に転写しているが、現在使用されていない活字が使用されている場合はやむをえず現代の活字で代用した。

### References

- Alexander, L. G., *Longman English Grammar* (Longman, 1988)  
Bauer, L., *English Word-formation* (Cambridge University Press, 1983)  
Bloomfield, L., *Language* (The University of Chicago Press, 1984)  
Chalker, S., *The Little Oxford Dictionary of English Grammar* (Oxford University Press, 1998)  
*Collins Cobuild English Grammar* (Collins, 1990)  
*Collins Cobuild English Guides: 2 Word Formation* (HarperCollins Publishers, 1991)  
Crystal, D., *Linguistics*, second edition (Penguin Books, 1985)  
Greenbaum, S., *The Oxford English Grammar* (Oxford University Press, 1996)  
Huddleston, R., *English Grammar: an outline* (Cambridge University Press, 1988)  
*Merriam Webster's Guide to Punctuation and Style* (Merriam-Webster, 1995)  
Quirk, R., et al., *A Comprehensive Grammar of the English Language* (Longman, 1985)  
Shertzer, M., *The Elements of Grammar* (Collier Books, 1986)